

トマト トマトキバガについて

1 生態

トマトキバガはトマト、ナス、トウガラシ、ばれいしょ、およびインゲンマメ等を加害する。本虫は夜行性で日中は隠れていることが多い。成虫の体長は5~7mmで、前翅は茶褐色の色地に黒色鱗粉が散在している。後翅の翅頂部はよく突出する。蛹の体長は約5mmで茶色。幼虫は1齢幼虫では体長約0.9mmでクリーム色、2齢幼虫では緑色、4齢幼虫では体長約7.5mmで淡いピンク色、頭部及び背楯は淡茶褐色、卵はクリーム色である。成虫の総産卵数は約260個である。成虫の寿命は雌が10~15日、雄が6~7日。年間世代数は10~12世代の多化性であるため増殖力は強い。卵から成虫までの生活環は環境に依存し、14℃で76.3日、19.7℃で39.8日、27.1℃で23.8日。卵、蛹および成虫で越冬する旨の報告がある。

成虫が飛翔により移動する。成虫は主に寄主植物の茎葉に産卵し、ふ化後、若齢幼虫は新芽や葉の内部に食入し、老熟幼虫は果実も食害（穿孔）する。食害された果実は腐敗する。幼虫は潜葉中で蛹となる、またはマルチの上下で作繭して蛹となる。



図1 成虫（体長約7mm）



図2 若齢幼虫(左)、4齢幼虫(中)、蛹(右)



図3 潜葉痕 上:トマトキバガ、下:ハメグリハエ類



図4 幼虫による果実穿孔食入

2 発生状況

本虫は冬春トマト産地ではハウス内で越冬する。本県の夏秋トマト産地では屋外での越冬はごく少数確認されるが、当初の餌不足のため、次世代につながるのは難しいと考えられる。一方、4月中旬頃より大陸からの飛来がみられる。夏秋トマト産地では飛来した個体が定着し、6月中旬頃から増殖を開始する。発生は一定期間ごとに不明瞭なピークを示しつつ徐々に増加し、防除圧が低下する10月後半に最盛期がみられる。以降は気温の低下と共に12月中旬頃に終息する。

本虫による被害は、本虫の飛行に適さない低い外気温下で被覆や細かい目合のネットにより野外と隔離した環境内で栽培される冬春トマトでよりも、目合の大きな防虫ネットしか使用できないため、本虫にとって飛来が容易な冷涼地の夏秋トマトの方が大きいことが明らかになりつつある。

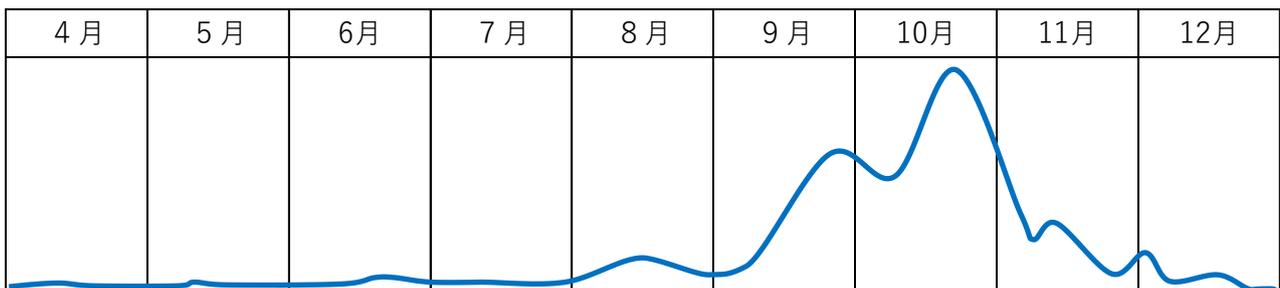


図5 トマトキバガ成虫発生長消長（夏秋産地）

3 防除対策

(1) 育苗期

本虫は前年多発ほ場付近での越冬や、大陸より飛来があるため、育苗ハウスには侵入防止効果がある0.8mm以下の防虫ネットを展張する。また育苗ポットには効果が長い粒剤を施用し、育苗時の寄生を防ぐ。

(2) 本ぼ

本虫は少数が不定期に大陸から飛来すると考えられ、まず葉に被害をおよぼすため、特徴的な潜葉痕を見つけたら必ず除去し、ビニル袋等に密閉し、死滅させる。被害が少ないうちはBT剤でも防除可能だが、潜葉痕が目立ってきたり、成虫の飛翔が頻繁に見られるようになった場合は、効果が高い薬剤（令和7年度病害虫情報第6号参照）で追加防除する。なお本虫は海外で多種類の薬剤に抵抗性が発達したことが報告されていることから、同一系統の薬剤使用は2世代期間おき（夏秋産地では最低でも60日おき）とする。また越冬する個体を減らすため、発生が継続している場合は収穫終了間近まで防除圧を下げないことが望ましい。

(3) 冬期間

薬剤抵抗性の発達を防ぐため、越冬させないことが重要である。越冬冬期間も全面被覆を続けるハウス等においては、本虫の耐寒性を発達させないよう初冬に急激な低温に長時間遭遇させる、5℃程度であっても3か月間を目標に低温にさらす、あるいは厳寒期になるべく長期間低温にさらす等の処置を施して死滅させる。